

神社の立地環境に関する基礎的考察

大同工業大学 学生員 ○田中 洋
大同工業大学 正 員 舟渡 悦夫

1. はじめに

日本全国に分布する神社は約8万といわれている。このうち、社務所があり、神職が神社を維持管理している神社の数は少なく、一年に数回の祭礼しか行わない神社も数多いようである。一般に、神社の存在は鳥居や社殿があること、あるいは鎮守の森と呼ばれてきた塊としての樹木があることにより知れる。このような神社境内の中の参道や社殿前の空間は、人の出入りに対して自由で公開になっているものが多い。すなわち、住民にとって自然豊かな緑地空間として、さらに出入りが自由な公開空間として、さらに地域の文化的な活動の拠点として、神社空間の新たな活用が期待されるといえよう。そのためには、神社の地理的分布状況、立地環境、維持管理の実態、住民による神社の利用状況やその評価など種々の検討を行う必要がある。

2. 調査の概要

本研究はその第一歩として、神社の分布状況、立地環境について何らかの普遍的な特徴を見いだすことをめざし、事例調査研究を進めたものである。

(1) 調査対象：典型的な盆地地形を有している岐阜県東濃西部地域の多治見市（人口約10万人、31神社）、土岐市（人口約7万人、54神社）において宗教法人登録がされている神社85社を調査対象とした。

(2) 調査方法：第1に、地形図(1/25000)、都市基本図(1/2500)、各種都市計画関連図(1/20000)などから地形、土地利用、各種施設についての読みとり作業を行った。つぎに、神社がある現地において神社境内の環境調査を実施した。多治見地域での環境調査は1994年1月に、土岐地域については1994年8月に実施した。

3. 神社の環境要因分析

(1) 地形立地類型：地形の断面形状から神社の立地を平地型(11)、山裾型(10)、山腹型(39)、山頂型(10)、台地型(15)の5つに分類した。この中で、山頂型は山間の奥地の頂上というより微地形において山頂とみなせうる地形が大半であり、台地型とは平地の中での微高地や崖の上の見晴らしの良い地形を指している。

表1 地形立地類型別の環境要因

環 境 要 因	該 当 内 容	地形立地類型別の該当神社数						
		I	II	III	IV	V	合計	%
河川までの距離	100m以内	4	4	18	2	9	37	44
急傾斜地域指定区域	指定地域隣接	0	1	2	1	3	7	8
社殿と山の斜面の方向	80～100度(一致している)	1	4	11	5	7	28	33
宗教施設の有無	200m以内にあり	4	0	9	1	9	23	27
墓地の有無	200m以内にあり	5	3	17	3	9	37	44
教育施設の有無	200m以内にあり	7	0	7	0	5	19	22
集会施設の有無	200m以内にあり	8	5	13	2	8	36	42
ゲートボール場有無	200m以内にあり	3	2	11	1	4	21	25
バス停までの距離	450m以上離れている	1	6	16	5	3	31	36
農地法適用地域	適用地域内	0	3	9	1	0	13	15
都市計画法用途地域	用途地域内	11	2	8	0	12	33	39
神社前面の土地利用	山林田畑あり	5	2	14	3	4	28	33
神社背面の土地利用	住宅・商店・工場等あり	9	2	0	1	10	22	26
本殿までの歩行時間	120秒以上	1	0	13	9	4	27	32
階段の有無	あり	2	10	35	8	13	68	80
階段の段数	50段以上あり	0	0	18	5	2	25	29
鳥居の方位	165～195度(南向き)	6	3	17	3	8	37	44
社殿の方位	165～195度(南向き)	6	1	9	3	6	25	29

(注1) I：平地型(11) II：山裾型(10) III：山腹型(39) IV：山頂型(10) V：台地型(15)
()は各類型別の神社総数

(注2) %：全神社数85社に対する該当神社割合

(2) 環境要因の全体的な特徴：

神社の環境要因を地形・土地利用・施設・神社境内環境の4つに大きく分類した。表1は主要な環境要因の内容を要約したものであり、以下特徴的な事項を記す。

①神社と河川の関連には深いものがあり、300m以内に河川がある割合は85%、100m以内に河川がある割合は44%となっている。②社殿の方位と山の傾きの方向をみると、33%の神社においてほぼ一致(± 10 度)している。③神社を中心とした200mの円内における該当施設の有無をみると、特に墓地(44%)と集会施設(42%)との関連が深いことが分かった。④土地利用からみると、農用地区域内に立地する割合は15%と少なく、都市計画区域の用途地域内に立地する割合が約40%、森林法適用地域内に立地するものが約25%あった。⑤神社の前面の土地利用が山林・田畑である割合は33%、神社の背面に建物などが多い割合は26%であった。

⑥神社境内の環境をみると、86%の神社には鳥居があり、80%の神社の参道に階段がある。特に29%の神社では50段以上の階段があった。⑦一般に神社は南を向いているという説があることから、現地調査により鳥居と社殿の向きを計測した。その結果、真南を180度とし ± 15 度の範囲を南向きであると仮定すると、鳥居では44%、社殿では29%の神社が南を向いている。なお、鳥居・社殿の向きは神社の系統や神社設立当時における集落の位置との関連があると思われるが、その分析については今後の課題としたい。⑧神社境内の入り口から神社本殿までの徒歩による所要時間をみると、15%値で0.6分、中央値で1.3分、85%値で3分となっている。

(3) 地形立地類型別の環境要因のパターン構造：

神社に関する環境要因の相互関連の構造を把握し、要因から見た神社のパターン分類を行うために、表1に示した18要因をカテゴリーとして数量化理論3類により分析を行った。その結果、1軸が0.35、2軸が0.22、3軸が0.20の固有値を有しており、各軸のカテゴリースコアの布置状況を検討し、図1に示す1軸と3軸のカテゴリースコアの散布図から、神社における環境要因のパターン分類を考察した。

図1の1軸(横軸)は「都市化-自然」、3軸(縦軸)は「平坦-急峻」と解釈される。次に、図2に軸の意味を考慮して、地形立地類型を属性として各神社のサンプルスコアを布置した。その結果、以下のようない立地類型ごとの環境要因のパターンが得られた。

- ①平地型神社は施設数が多く、土地利用の都市化が進んでおり「**平坦市街地パターン**」に対応している。
- ②山裾型神社は前面に開けた農地を有し、施設数も少ないことから「**田園パターン**」に対応している。
- ③山腹型神社はサンプル数も多く、地形が平坦から急峻まで幅広く、やや自然側に偏り広い範囲に布置していることから、「**丘陵地パターン**」に対応すると思われる。
- ④山頂型神社は山奥に入り込み、階段の段数、歩行時間が多いことから「**山間地パターン**」といえよう。
- ⑤台地型神社はその周囲は市街化されており、地形形状が多様であることなどから、「**起伏市街地パターン**」に対応すると思われる。

+ 山腹(39) ◇ 台地(15) △ 平地(11) × 山裾(10) ▽ 山頂(10)

